

複合動詞後項における意味的抽象化に関する研究 移動動詞を中心に

著者	王 秀英
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第582号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132074

論文要旨

複合動詞後項における意味的
抽象化に関する研究
—移動動詞を中心に—

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
王 秀英

本論文は現代日本語における複合動詞後項の意味的抽象化についての研究である。

生産性のある複合動詞後項における意味的抽象化を文法化の視点から考察を行った先行研究は田辺（1996）のみである。本論文は後項の意味的抽象化を段階的に捉える点は田辺（1996）と同じ立場であるが、移動動詞を後項としての複合動詞の意味抽象化の傾向を一般化していることが先行研究には見られない観点であると言える。また、先行研究では、「後項が前項を副詞的に修飾する」ものについて詳しく論じていないのも問題になる。

本論文は主に移動を表す複合動詞の後項「―こむ」、「―あげる」、「―あがる」、「―だす」、「―つける」、「―かける」、「―ぬく」、「（―きる）」を研究対象として、それぞれの意味的抽象化について考察している。研究対象となる複合動詞後項を選定する際に、①生産性が高いもの、②後項には意味的抽象化が見られるもの、という特徴を持つグループに限定している。

第1～4章は本論文の研究背景、先行研究及びその問題点、用語などについて説明している。

第5章では、認知意味論の観点から、日本語複合動詞「～こむ」類と中国語複合動詞「～進／入」類の意味がどのように拡張しているのかについて考察している。両者の対応関係及び意味拡張の方法の異同について説明している。

第6章では、認知と文法化の視点から、上昇を表す日本語複合動詞「～あげる」と中国語複合動詞「～上」の意味について、基本義から拡張義までの意味発展のプロセスを明らかにした。日本語複合動詞「～上げる」は空間的上昇に深くつながっていて、拡張義も「空間的移動」から派生している。中国語複合動詞“～上”は全体的に空間と動詞の内在的時間に関わっていて、意味の派生は空間と動作の時間軸における位置によって捉えられると述べている。

第7章では、本動詞と複合動詞の後項との関連から複合動詞「～つける」の意味的抽象化について考察している。後項において、各意味はいずれも動作のある要素が「ある到達点に至る」という共通点を持っていることが明らかになった。

第8章では、移動動詞を複合動詞後項とする場合の「―こむ」、「―あげる」、「―あがる」、「―だす」、「―つける」、「―かける」、「―ぬく」を取り上げ、それぞれの意味的抽象化の傾向について論じている。考察の結果として、これらの複合動詞後項の意味を「方向」、「アスペクト」、「副詞的修飾」、「モダリティ（感情的意味）」の4段階に分けられ、意味的抽象化の傾向は「方向→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ（感情的意味）」ということになると考えられる。

第9章では、複合動詞「～こむ」と「～きる」の強調を表すものを対象とし、中で

も用例が多く、同じ前項動詞を持っている「冷えこむ」と「冷えきる」に重点をおいて、それぞれの特徴を考察してきた。考察結果として、具体的な天気やものの温度を表す場合と抽象的な両国関係や夫婦関係などの場合では両方とも使える。具体的なものを主体とする場合には、「冷えきる」の範囲が広い。それに対して、抽象的なものを主体とする場合には、「冷えこむ」の範囲が広い。また、強調の意味を前提として「～こむ」と「～きる」の前項動詞を分析すると、それぞれ活動動詞と状態変化動詞が結合されやすいことがわかった。

第 10 章では、複合動詞後項「～こむ」について、後項がどのように前項を修飾しているのかについて論じている。従来「程度進行」の意味として扱われたグループには、程度の強さから、動作主の主観性、第三者の評価まで意味が幅広く拡張している例が観察できた。さらに、複合動詞「～こむ」の文法化のプロセスを分析して、意味の焦点が「空間」から、「動作の程度」、「動作主の視点」、「第三者の視点」へと移っていることが明らかになった。

第 11 章では、複合動詞「～つける」について、後項が前項を副詞的に修飾する場合のあり方およびその成立要因を分析している。「後項が前項を副詞的に修飾する場合の「～つける」は、意味の中心が左側にある。このグループの「～つける」は前項動詞が対象(対象物)に変化をもたらすかいないかによって「動作の結果を修飾する」ものと「動作の過程を修飾する」ものに分けられる。前項動詞の性質及び「一義的経路の制約」からの影響は、後項の意味が副詞的意味になる要因だと考えられる。

従来の研究には、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に 2 大別されているが、本論文では、後項が移動動詞の複合動詞を対象として分析した結果、4 段階に所属させる複合動詞は「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」にまたがっていることが明らかになって、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分ける必要性を疑問視されるのではないかとと思われる。後項の意味的抽象化の 4 段階には、「副詞的修飾」(後項が前項を副詞的に修飾するもの)という段階を設けて、「副詞」との関わりから、複合動詞の後項における意味的抽象化を論じることによって複合動詞の研究に新たな分析視点を提示できたと考えられる。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	王 秀 英
論文審査担当者	(主査) 教授 小林 隆 教授 大木 一夫 教授 甲田 直美 教授 後藤 斉
論 文 名	複合動詞後項における意味的抽象化に関する研究 —移動動詞を中心に—
<p>本論文は、移動動詞を中心に、複合動詞後項における意味的抽象化の問題を考察するものである。全体は序論、本論、結論の3部構成をとり、12の章から構成される。</p> <p>まず、序論は4つの章から成り立つ。第1章「複合動詞後項の意味的抽象化」は、本論文のテーマである「意味的抽象化」という概念について定義を行う。第2章「先行研究」と第3章「本研究の立場」は、本論文に関わる先行研究を整理したうえで、本論文がとるべき立場を明確にする。第4章「本研究の目的とその構成」は、次の章以下の考察の目的を提示し、論文の構成について説明する。</p> <p>次に、本論は第Ⅰ部の4つ章と第Ⅱ部の3つの章から構成される。第Ⅰ部は複合動詞後項における意味的抽象化を全体的に扱い、第Ⅱ部は特に複合動詞後項の「副詞的修飾」に焦点を当てる。</p> <p>第Ⅰ部の第5章「日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞「～进/入」類との対照研究—認知意味論からのアプローチ—」は、認知意味論の観点から、「～こむ」類と「～进/入」類の意味拡張がどのように対応するかを論ずる。第6章「上昇を表す複合動詞の日中対照研究—「～上げる」と「～上」を対象として—」は、文法化の視点も交え、「～上げる」と「～上」の基本義から拡張義までの意味発展のプロセスを明らかにする。第7章「複合動詞「～つける」の後項の意味について—本動詞との関連から—」は、本動詞と複合動詞後項との関連から「～つける」の意味的抽象化について考察する。第8章「複合動詞後項における意味的抽象化」は、さらに対象語を増やして論じることで、その傾向が「原義（方向）→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ（感情的意味）」の4段階として説明されることを明らかにする。第Ⅱ部の第9章「強調を表す複合動詞後項の成立要因について—「～こむ」と「～きる」を対象として—」は、複合動詞後項の「副詞的修飾」のあり方を検討する。第10章「複合動詞の後項が前項を副詞的に修飾する場合—「～こむ」を対象として—」は、前章の「～こむ」について、あらためて文法化のプロセスを分析する。第11章「複合動詞後項における副詞的意味のあり方について—「～つける」の場合—」は、また別の事例から複合動詞後項が前項を副詞的に修飾する場合の特徴とその成立要因を考察する。</p> <p>最後に、結論の第12章「終章」は、各章における論述を全体的に振り返りながらこの研究の成果と意義を述べ、本論文で解決までに至らなかった問題点や今後の課題などを指摘する。</p> <p>日本語の複合動詞についてはこれまでも研究が盛んに行われてきたが、本論文は動詞後項の違いに注目し、その意味的抽象化が4つの段階に分けてとらえられることを提案した点に特色がある。また、3つ目の段階として「副詞的修飾」という段階を設定し、その特徴について明らかにした点に意義が認められる。その成果は、従来の複合動詞研究を大きく前進させたものとして高く評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	